

平成二九年十二月号

落葉

佐怒賀正美

無二の世を落葉の孔あなの網目越し
襟巻に親しみながら溶けながら
マフラーの長きが散らす宇宙塵
海馬いきいきマフラーを巻いてより
コートぶかぶかヒップホップでもするか

平成二九年十一月号

くびれ

佐怒賀正美

テノールの声の肉づく水の秋
移りゆく記憶のくびれ秋の川
秋の川人にしたしみよみがへる
虫の夜やことばさがしの赤ん坊
晩秋の眉間を覚ます化粧水

平成二九年十月号

秋蟬

佐怒賀正美

ちつちゆうとせふなぐ
蟄虫坏戸 虹の欠片は入れてある

海にミサイルやがて台風が揉む

鳥たちの時間に入り込む秋思

鼻母音は苦手な秋の鳥かな

秋蟬や額のひろき神の巖

平成二九年九月号

星河

佐怒賀正美

セシウムにドローンに腐草から蛍
空中水槽めぐるペンギン虹ひらく
神鳴がつながりだして赤子笑ふ
阿弔流為と星河に息を吹き返す
八方を愛でつつ星河くだりかな

平成二九年七・八月号

花菖蒲

佐怒賀正美

花菖蒲ひとつも武器になるはなし
可視不可視仙人いづこひきがへる
未来とは黄泉の爆発さるすべり
ごきぶりの仮死より覚めて頼りきぬ
マンホールに刻む帆船虹ひらく

平成二九年六月号

無辜

佐怒賀正美

初夏や生後むにやむにや百時間
こいのぼり詩歌の奥の佳き自由
爆ぜ合へる一日の仮装リラの花
古草の悲の一塊をはみ出す手
再会やカレー餛飩に汗噴いて

平成二九年五月号

青き踏む

佐怒賀正美

龍天に登り弾道見極めむ
春の夜やスクロールして鯨瞰図
星に継ぐ血の全量や青き踏む
晩年のすめらぎ産声のたけのこ
御衣黄やひがしの苑にあかんぼう

平成二九年四月号

四月馬鹿

佐怒賀正美

か
げ
ろ
う
や
肉
体
滲
み
だ
す
巨
石

田^{でん}
鼠^そ
化
し
て
鶉
と
な
り
ふ
む
ふ
む

落
飾
の
果
の
草
生
や
し
や
ぼ
ん
玉

入
れ
替
は
り
弟
を
撮
り
初
ざ
く
ら

自
己
愛
を
解
凍
し
つ
つ
四
月
馬
鹿

平成二九年三月号

眼球

佐怒賀正美

渡月橋春の赤子を容れ自撮り
眼球の奥のつながり水温む
細くしてエッジを利かす春の滝
鳶匂ふごとく舞ひをり小野霞
いい場所は男女にゆづり春の滝

平成二九年一・二月号

唐変木

佐怒賀正美

水洩や降魔の相をなかぞらに
法灯や闇をつらぬく凍て柱
列柱に容赦なき冷え比叡山
冬三日月靈峰の水めぐる街
シリウスや唐変木にそぞろ神